平成26年度　推薦入学・帰国子女特別選抜・社会人特別選抜・編入学　小論文
出題の意図と解答の傾向

問題１

【出題の意図】

現在、わが国では、国及び地方の長期債務残高があわせて1000兆円を超え、国家財政・地方財政ともに危機的状態にあり、改善策が求められている。課題文として取り上げた井手英策『日本財政　転換の指針』(岩波書店、2013年)は、財政に関する様々なデータを紹介するとともに、様々な国・地域の事例をもとに、財政を転換するための指針を提示している。

本問題の出題の意図は、第一に、地方自治や地方財政に対する受験者の理解度を問うことである。ここで取り上げた内容は、経済学部の受験者にとって日頃から関心を持ってもらいたい重要なテーマである。第二に、文章を正確に読み取り、著者の主張を正確にふまえて、受験者が自分の意見を具体的・論理的に説明できるかどうかを確認することである。自分の考えを具体的に述べるためにも、日頃から社会の動きに関心を持っておく必要があると考える。

【各問の解説】

＜設問1＞

本問では、本文で紹介されている鳥取県智頭町における住民参加の展開を、的確かつ具体的にまとめることを要求した。本文で示されている「ゼロ分のイチ村おこし運動(ゼロイチ運動)」や「百人委員会」がどのようなものであったのか、それらがどのような地域社会に立脚していたのか、行政との関係がどのようなものであり町の予算にどのように反映されたのかを具体的に述べる必要がある。

＜設問2＞

本問では、予算編成への住民参加を進めるべきかどうかについて、「本文をふまえて」「あなた自身の考え方」を述べることを求めた。

「本文をふまえて」という設問であるため、本文の内容と関係がある議論を展開する必要がある。本文では、鳥取県智頭町の事例の記述をふまえて、「汗をかく民主主義」の重要性が説かれている。単純な財政の議論ではなく、民主主義の成熟度を問う筆者の意図を汲み取って、「予算編成への住民参加を進めるべきかどうか」の是非を判断してほしかった。

「あなた自身の考え方」では、受験者自身の立場を明確にし、根拠ある議論を組み立ててほしかった。日頃から新聞記事などに目を通し社会への関心を高めておくとともに、「現代社会」や「政治・経済」などの授業で、社会科学の基礎的な知識を得ておく必要がある。

【解答の傾向】

設問1については、比較的よくできていた。多くの答案で、「ゼロイチ運動」や「百人委員会」を指摘していたが、行政との関係や町の予算との関係にまで言及しているものは少なかった。ただし、「本文中から読み取れる内容」と問うているにもかかわらず、自説を述べる答案も一部見られた。

設問2については、全体的な傾向としては、「予算編成への住民参加を進めるべき」という意見が多かった。本文の内容をまとめるものだけに終始している答案が多く、自分の考え方を提示しているものは少数であった。

「国民の政治への無関心」や「消費税8%への増税」など国政レベルの議論と混同しているもの、受験者の出身地や学校(生徒会活動)などの事例を取り上げているが表面的な記述

に留まるものなどが散見された。地方自治や地方財政に関する知識が欠如していると思われる答案がいくつかあり、中学・高等学校レベルの基礎的な知識を正確に理解してもらいたい。

接続詞の使い方に問題がある答案も多かったため、本文の内容を論理的に組み立て直し、適切な接続詞を用いてほしかった。

基本的なところでは、誤字・脱字が多かったのが気になった。たとえば、「予算編成」が「予算偏成」に、「耳目をひく」が「耳目をひらく」に、「秩序」が「秋序」に、「公共事業」が「公共事行」に、といった間違いである。これらは本文にも記載されている漢字・語句であるので、正確に読み取る必要がある。

問題２

【出題の意図】

問題２は、サブサハラアフリカの諸国の人口、資源分布、GDP に関する図表から、同地域の経済状況を読み解く問題を出題した。

出題に際しては、地域全体の経済動向を読み取る問題と、各国についての情報を元に国々を類型化し、類型ごとの特徴を読み取る問題を設定した。

＜設問１＞

設問１は、図１および図２からサブサハラアフリカの経済的状況を読み取る問題である。

図１はサブサハラアフリカの一人あたり GDP の推移を描いており、図２はサブサハラアフリカの実質経済成長率の推移を描いている。

図１では、サブサハラアフリカ以外に、インドおよび中国の一人あたり GDP の推移を、図２では世界全体の実質経済成長率の推移を描いており、出題者は、これらとの比較を踏まえながらサブサハラアフリカの経済状況について以下の点を読解してもらうことを意図していた。

具体的には、図１では、サブサハラアフリカの１人あたり GDP が、1991 年にはインドおよび中国のそれを上回っていたこと、その後、中国・インドがサブサハラアフリカを追い越して経済発展を遂げる一方で、サブサハラアフリカの一人あたり GDP は約 600 ドルにとどまっていることを読み取ってもらいたかった。

また、図２では、サブサハラアフリカは、中国・インドと比べれば停滞しているように見えるが、世界全体と比べれば経済成長率が高く推移しており、特に 2000 年代は高い経済成長を遂げていることを読み取ってもらいたかった。

＜設問２＞

設問２は、図３および図４からサブサハラアフリカの主要国で一人あたり GDP が多い国（高所得国）と少ない国（低所得国）の違いについて、資源分布と人口の視点から説明する問題である。

図３は、サブサハラアフリカ主要国の人口と一人あたり GDP を描いており、図４はアフリカにおける資源産地の分布を描いている。

出題の意図としては、図３から、サブサハラアフリカ主要国を一人あたり GDP が多い国（高所得国）と少ない国（低所得国）に分類した上で、図３および図４よりそれぞれの分類の特徴について説明してもらうことを狙っていた。

具体的には、図３からは、ガボン、ナミビア、ボツワナ、南アフリカの一人あたり GDP が 2000 ドルを超えている一方で、その他の国々では 1000 ドルを下回っていることが見て取れる。前者の国々を詳しく見ると、南アフリカを除く 3 カ国については、いずれも人口

が 1000 万人を大きく下回っていることがわかる。一方、後者の国々では、いずれも人口1000 万人を超えている。出題者としては、こうした点の読解を期待していた。

図４については、ガボン、ナミビア、ボツワナ、南アフリカは内陸あるいは近海に資源が分布していることが見て取れる。また、それ以外の国は、資源が分布している国もあれば、分布していない国もあること、そして、上記 4 国以外で資源が分布している国は、図３に戻ってみると、相対的に人口が多いことがわかる。出題者としては、こういった点を指摘してもらうことを狙っていた。

その上で、これらのポイントに目配りしつつ、南アフリカのような例外的なケースにも配慮しながら、高所得国と低所得国の違いを資源分布と人口の視点から尋ねている出題の趣旨に即して、論理的に議論を構築して、解答してもらいたかった。

【解答の傾向】

＜総論＞

問題 2 は、図表から読み取れる客観的事実に関する出題に、客観的・論理的に解答するよう求めた問題である。しかし、問題文の趣旨に正確に答えていない解答が多く見られたことは残念であった。問題文を丁寧に読み、出題趣旨を理解した上で解答することが重要である。

＜設問１＞

設問１については、解答により、注目点や読み取る内容のばらつきが大きかった。とくに気づいた点を、あげると次のようになる。

まず、アフリカということから連想する思い込みで、貧困や感染症、内戦など図１・２に全く描かれていないことを書いている解答がいくつか見られた。

次に、図１についてはサブサハラアフリカの一人あたり GDP が単に横ばいであると指摘するにとどまる解答が多かった。この図は、急成長する中国、インドと並べて描いているため、サブサハラアフリカの一人あたり GDP は、一見横ばいの印象を与えるが、詳しく見れば、2000 年代以降、一人あたり GDP が成長していることが見て取れる。だが、そこまで気づいている解答は少なく、中国、インドとの比較に言及した解答は多くなかった。

図２については、世界全体の実質経済成長率の変化とサブサハラアフリカの実質経済成長率の変化とが類似していると指摘し、さらに、そこからグローバル化の影響を論じた答案やリーマンショックの影響を論じた答案がしばしば見られた。この図からは、世界全体と比較して 2000 年代にサブサハラアフリカの経済成長率が高くなっているという事実は読み取れるが、それを超えて貿易や金融の変化まで論じるのは論理に飛躍があるように思われる。

最後に、設問１に関し細かい点ではあるが気づいた点として、２点指摘する。まず、初歩的なミスともいえるが、図１についてサブサハラアフリカとインド、中国の３国について、凡例を読み違えて、中国のグラフを元に書いているとみられるような解答が幾つかあった。また、基本的な国語力についても、たとえば、「GDP の推移が増加している」といった類いの、そもそも言葉の意味を理解しているのか疑われる解答が幾つかあった。推移を見る問題は過去にもたびたび出題されているので、言葉の意味は理解して試験に臨んでもらいたいところである。

＜設問 2＞

設問１と比べると、よく読み取れている解答が多かった。

それだけに、全体の傾向としては、解答者の論理力、構成力の高低が解答にはっきりと反映されていたように思われる。出題の意図をよく読み取り、高所得国と低所得国の類型化をした上で、それぞれの特徴を論理的に説明する解答が見られる一方で、問題の趣旨を理解しておらず、根拠のない推測を述べたり、政治・民族・文化などに関する自説を展開したりする解答がいくつも見受けられた。

図３は、横軸を人口と一人あたり GDP という異なる２つのものを表すように使ったグラフである。このグラフ自体は、概ね読み取りができていたようである。しかし、人口と一人あたり GDP は単位の異なる全く別の概念であり、単純に比較できない。にもかかわらず、「一人あたり GDP が人口より多い」などといった解答がいくつも見られた。

図４は、単に資源の分布状況を読み取ればよいだけの図である。ところが、国ごとの面積の違いや、内陸部か沿海部かなど、問題文が問うている「資源分布と人口の視点から」という範囲を逸脱した読み取りや推測を展開する解答が少なくなかった。それ以外にも、「人口の多い国は資源がない」、「人口の少ない国は資源がある」といったような、データを丁寧に読み取らず一部の事例だけから一般的結論を導いてしまっている解答も多数見られた。

結果的に、出題に沿って論理的・客観的に解答した答案と、出題を離れ自説や憶測を展開した答案とで得点に大きな開きが生じることになった。